
あなたへの想い

瑠璃色の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたへの想い

【Nコード】

N4363J

【作者名】

瑠璃色の墮天使

【あらすじ】

短編第二弾。

今回も栞編です

「そろそろ日差しが強くなってきたな」

「そうですね、祐一さん。あ、お茶、どうですか？」

「お、サンキュー、栞」

おれは栞から水筒のコップに入ったお茶をうけとり、おもむろに音を立ててすする。

この飲み方をしていると、名雪に以前文句を言われて、シヨックをうけたことがある。

いまだにやめてはいないが。

「それにしても、私、屋上に来たのははじめてです」

「俺は昼休みにときたま来てるぞ。今ぐらいが気持ちいいんだ」

俺は最近の日課として、昼は栞が作ってくれる手作りの弁当を食べている。

栞は日に日に料理の腕前も上がり、最近は待ち遠しいくらいである。

いつもは学校の食堂で食べているのだが、たまにはと俺が

栞を誘って、ここ屋上へとやってきたのだ。

「風が気持ちいいですね、祐一さん」

「だろ？こうやって寝そべったら最高だぞ」

俺は寝そべって、大きくのびをした。

「あ、祐一さん、食べてすぐに寝るとブタさんになりますよ」

「大丈夫。栞ほどにはならないから」

「ひどいです！私はそんなに太っていません」

栞が頬を膨らませて怒っている。

「そんな事言う人、嫌いです」

「冗談だつて」

「冗談でも傷つきました」

しばらくそうして栞をからかいつつ、楽しい会話をしていたが「ところで祐一さん、今日一緒に帰りませんか？」

「あれ？部活のほうはいいのか？」

栞は二年生になって、部活動がやってみたいと言い、なんと演劇部に入ったのだ。

昔から舞台のたぐいには興味があったらしく、結構真面目に家でも練習しているようだ。

香里が家でよく練習相手をさせられると苦笑まじりに話していた。「はい。今日は顧問の先生が私用でお休みなので、練習のほうもお休みになりました」

「そうか。じゃあ校門で待ちあわせしようぜ。俺のほうも今日は特に何もなしな」

「よかったら私、祐一さんの教室のほうへ行きますよ」

「いや、栞がきたらいろいろ騒ぎになるから」

「・・・私が行ったらどうして騒ぎになるんです？」

不思議そうに栞は首をかしげる。

「ま、まあいろいろとな・・・」

俺はあいまいに言葉を濁した。

実は正確には約一名騒ぐやつがいるのであるが・・・

俺はある意味での宿敵、北川の顔を思い浮かべ、ため息を吐く。

「わかりました。それでは放課後校門で。遅れちゃだめですよ」

「大丈夫。忘れない限りすぐに行くぞ」

「忘れちゃだめですよー！」

その後予鈴が鳴るまで、俺達は心地よい風を背にくつろいでいた。

「えいえい！」

ぽかぽか！

栞はかけ声をあげながら、出てくるばい菌をたたいている。

いや、正確には叩こうとしているといった方がいいかも・・・

俺は半ば感心しながら、その光景を眺めていた。

校門で待ちあわせた俺達は、その後ゲームセンターへと行った。なんでも栞いわく、新しく「ばい菌撲滅」とかいうもぐらたたきのバイ菌ヴァージョンが入ったからということできてはみたものの……

「とうえい！あれ？あたりませんね……」

出てくるばい菌と栞のハンマーの速度には差があり、まったく栞のハンマーは、ばい菌にかすりもしなかった。

まるでばい菌に遊ばれているみたいで、見ていて面白かったりする。そして制限時間が過ぎた。

「ゲームオーバーだな」

「ふう、ちよつと疲れました」

栞はハンマーを元の位置に戻した。

「かなりはりきってたな、栞」

「はい、頑張りました」

「でも結果にはあらわれてないぞ」

こういった類のゲームはプレイヤーのランク付けがされる。

このランク付けは、たたいた敵の数によって評価がされるが、

栞の評価はというと……

「素人以下、だつてよ」

「そんな事言うう人、嫌いです」

「だって十回もあたらないんじゃない……」

「うう、それは……」

栞のランクは五段階のうち最低だった。

「気にするな。栞にはちよつと反射神経その他が足りなかったただけだ」

「気にしますよ！」

「うーん、じゃあ才能が0に近いとか……」

「そっちのほうかひどいですよ」

栞はかなりむくれて言った。

「もうちょっと頑張らないとな」

「うっ……なら祐一さんが手本を見せてください」

「え？俺が？」

「そうです。ぜひ見せて欲しいです」

そう言つて栞はハンマーを俺に差し出す。

「さあ頑張ってください！」

どうやら何があんでも手本を見せなければならないようだ。

「よし！じゃあ見てろよ」

俺は100円をマシンに投入し、ハンマーをかまえる。

ふふ、栞、俺の実力を見せてやるぜ！

「さあ、来い！」

まるで俺の声が合図となつたかのように、
ばい菌がぴよぴよ顔を出しはじめた。

「甘いぞ、お前ら！オラオラオラ！！」

我ながらすばやい動きと動作で、ばい菌を次々にのしておく。

今日はかなり調子が良かった。

すべてが終了した後の俺の評価は最高だった。

「ふ、見たか、栞」

「すごいです、祐一さん！私じゃあんなに早くたたけませんよ」

栞がしきりに感心したようにうなづく。

「まあ栞もやり込んだらもつと高得点だせるって」

「ははは、本当にそうならいいんですけどね……」

困つたように栞は苦笑する。

「よし、じゃあ次はクレーンに挑戦だ」

「あ、私、これならちよつと得意ですよ」

そうして俺達は時間を忘れて今のこの時を楽しんだ。

ゲームセンターを出たころには、あたりはかなり暗くなっていた。

「だいぶ熱中してしまったな」

「はい、さすがに疲れました・・・」

何せ二時間以上はやり込んでいたからな・・・無理もないか。
俺の財布の軽さもそれを物語っている。

「じゃあ家まで送るよ」

「え、でも悪いですよ・・・」

「今更遠慮なんてするなつて。こんな夜に女の子一人
帰したら危ないからな」

「・・・ありがとうございます、祐一さん」

栞は頬を染めて、小さい声で礼を言った。

「でも栞を襲う奴なんていないか」

「そんなこという人、嫌いです」

栞は笑顔をくずさずに言った。

そして俺達は栞の家まで歩いていった。

「・・・あの祐一さん」

「うん、何だ、栞？」

「・・・恋愛ドラマだとこんなシーンで、恋人同士で
何をすると思います？」

「うーん、なんだろうな・・・」

俺はあえて栞に答えを促した。

「・・・きつとこうしますよ」

栞は俺の腕に抱きつきもたれかかった。

「基本だな・・・」

「嫌いですか、こういうシーンは？」

栞はもたれたまま、上目づかいに聞いてくる。

「いや・・・俺は好きだぞ、こういうの」

「はい・・・」

町のネオンが静かに俺達を彩ってくれていた。

< 終 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4363j/>

あなたへの想い

2010年10月28日03時02分発行